

丹後郷土資料館調査だより

2012年3月16日 第1号

「収穫を問うなかれ、ただ耕耘を問え」

清末の政治家・軍事家・文人の曾国藩に、「力を尽くすプロセスこそが大切だ」という意の言葉があります。

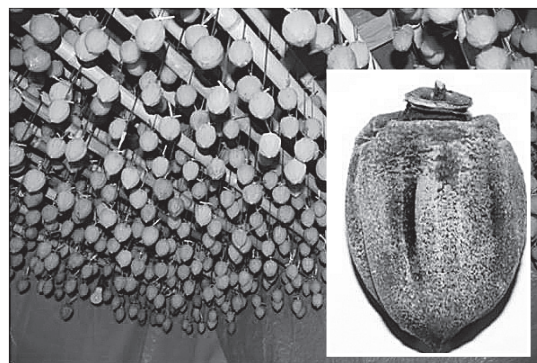
府立丹後郷土資料館は創立以来、40年余にわたり京都府北部の歴史や文化を調査研究し、資料の収集保存、展示活用など、未来に伝える営みを積み重ねてきました。

当地の郷土資料館として、地域の歴史・文化を紐解き、現在また後世に生かすためには、不断の調査研究が基盤となることは申すまでもありません。

しかし、その営みをお伝えする「資料館報」は昭和63年度第10号、また、「資料館だより」も平成16年度第41号以降、発行がありませんでした。

今般、小冊子ではありますが「調査だより」を発刊し、当資料館の活動の一端をご紹介するとともに、公立施設として府民の皆様にご覧のあり様をご説明する一助としたいと考えております。調査、保存、活用を一連一体のものとして機能させ、府民の皆様にご利用いただける施設であるよう気持ちを新たに、発刊のご挨拶といたします。

京都府立丹後郷土資料館長 氏松 昌平



与謝ころ柿：与謝野町香河（左：大美濃柿の木と実 右：乾燥作業と完成したころ柿）

目 次

■ 「収穫を問うなかれ、ただ耕耘を問え」	館長 氏松昌平	1
■ 与謝ころ柿の加工技術について	横出洋二	2
■ 神明山古墳出土の船の描かれた埴輪	奥村清一郎	4
■ 安政江戸地震時の宮津藩の被害情報について	吉野健一	6
■ 2011年度のあゆみ		8

与謝ころ柿の加工技術について

横出洋二

はじめに

干柿の中にコロガキがある。現在、乾燥させたときの水分量が、25～30%がコロガキ、50～60%がアンボガキとなっている。京都府において、コロガキは、南部山城地域の宇治田原町が産地としてよく知られている。しかし丹後地域のコロガキ生産については、広く知られていないのではないだろうか。丹後では与謝野町が産地で、戦前から「与謝ころ柿」として京阪神方面にも出荷されてきた。今回は、その与謝コロガキの加工技術の一端について紹介したい。

1 『与謝古ろ柿に就て』に見る沿革

与謝ころ柿の沿革については、昭和8年(1933)に京都府与謝郡与謝村農会が発行した小冊子『与謝古ろ柿に就て』に記されている。同書によると、「沿革は詳ならずと雖も今を去数百年前より山陰の霊境大江山山麓一帯に栽植せられたる美濃柿を原料として生産せられた」と記す。そして「世の変遷に伴ひ人の嗜好も昔日の如くならず故に明治の中頃より漸次斯業は衰退し昔の面影を止めざるに至る」とある。史料が明示されていないので、起源や近世の生産状況については不明だが、明治中頃以前にはさかのぼると考える。

明治42年(1909)発行の『京都府園藝要鑑』には、天田郡雲原村(福知山市)、加佐郡志楽村(舞鶴市)、中郡五箇村(京丹後市)熊野郡久美谷村(同市)に白柿の記述がある。白柿は白い粉を吹くので白柿という。志楽村の項に、「(イ)、白柿の製法 コロ柿には多く大美濃を用ゆ」とあり、白柿がコロガキにあたり、志楽村以外は「白柿」と記し、丹後では、白柿がコロガキにあたると思う。

さて、明治末に衰退したとされる与謝のコロガキだが、『与謝古ろ柿に就て』では、大正の初年頃に与謝村の和田松治氏が、「衰退し行く斯業の前途を憂ひ」、先進地の観察や研究につとめ、設備も整へ「新時代に相応せる製品を産出せんと努力」したが、効果がなかったと記す。しかし、同村の藤原長治氏もコロガキに関心が深く、新しい製法や時代に適合したものにすべきと考えてい

た。時代の適合については、新暦が普及して、正月も新で祝うようになり、現今のように旧暦に併せて生産していたのでは、出荷時期を失うと考えた。そのためには新しい製法の導入が必要と考え、同村出身で盛岡農林高等学校卒業後、柿栽培の先進地、福島県伊達郡の農会の技手としてつとめていた砂野徹夫氏から伊達郡での「新しく行はれ成績良好にて其の名聲を揚げつつある製法」を聞き、その製法の研究に努めたところ「成績良好にして予想外の優品」を収穫できた。

昭和5年(1930)に加悦町で開催された「地方聯合農産物品評會」に藤原氏は、コロガキを出品し、「其の品質の優良なること食味の佳良なることに多くの参観人をして驚異せしめたり」との評価を得た。そこで与謝野町長が「農家経済の一助」たらしめんと普及改善の方針を出し、翌年伊達郡農会に砂野技手の派遣を依頼して試験的製造を行った。販売についても京都府農事試験場の吉村技師、同府農林蠶糸課山口技師の協力を得て、専用の容器を持って「美装」して出荷した。市場で好評を得たため「昔日の盛況に返さん」と、本格的に与謝郡内一円に普及を図ることになり、藤原氏を講師として郡内各町村で講習会を開いた。

昭和8年には京都府も普及を図り、農林蠶糸課の主催で、同じく藤原氏を講師にして両丹7郡で講習会を開催している。同冊子では、「ころ柿」の品種は美濃柿で、与謝村の当時の柿の生産量は14000貫でそのうち美濃柿は7000貫と記し、5カ年計画で増産を図る予定と記す。

現在既知の範囲で同冊子以外文献が無いので、同書の内容を別の資料から確認検討することはできないが、おおよその沿革は、わかるかと思う。

2 与謝ころ柿の生産加工について

『与謝古ろ柿に就て』では、従来の加工技術について、明治頃まで霜月に美濃柿を採取して、皮を剥いで日当たりのよい柿小屋や軒端に縄で吊したと、記すだけである。そして従来の生産の欠点は、旧正月の「祝柿」に合わせて生産しているため、生産日数が長くて、新正月が普及した「新時代」の市場では、出荷時期がずれるということである。そのため新正月に合わせて出荷するには、

新たな技術の導入が必要で、砂野氏への指導依頼となったが、伊達郡での「名聲を揚げつつある製法」については具体的に記していない。出荷時期の問題から推測すると、製品化を早めなければいけないことになるが、そうすると乾燥期間が短くなる、あるいは早く乾燥させるということが課題となったのではないだろうか。これについて現在の生産加工と『京都府園藝要鑑』から考えてみたい。

「与謝ころ柿」は与謝野町内で広く生産されているが、JA京都加悦支店与謝ころ柿生産部会に加入している生産者は16軒である。その中の与謝野町香河の山崎保家の事例を紹介したい。山崎家では、11月初旬にカキボリ（柿採取）を行う。品種はオミノガキ（大美濃柿）で、屋敷近くに大木がある。採取方法は、籠を持って登り、届く範囲は手でもぎ、手元から遠い実はハサミダケで枝を折って手元によせてもぎ取り、籠に入れる。そして、自宅で専用の皮剥き器で、枝一部をT字に残して蒂を取り、縦方向に皮を剥く。横に回転させて剥くと、段の筋が入り仕上がりの形が悪くなる。蒂もきれいに取り除かないと食べたときの口当たりも悪いので気をつけて取り除く。

保氏の奥さんの実家は、戦前から「与謝ころ柿」の生産が盛んな同町山河地区で子供の頃には柿剥きを手伝った。寒い中ムシロを敷いた座敷で家族総出の柿剥きはつらかったという。現在の専用の柿剥き器は最近使用するようになったもので、以前は刃渡りの短い包丁を使った。ピーラーも薄く剥けて便利なので使っている。剥き終わるとジョタンを使って硫黄の煙で蒸す。ジョタンは木製の箱で、中に柿を吊し、下に缶に入れた硫黄を加熱させて扉を閉め、20分くらい蒸す。この作業は、タンニン物資の酸化による黒ずみを防いで、飴色の色艶のよい仕上がりになり、またカビを防ぐ。

燻蒸の後作業小屋の中にシートで仕切って作った乾燥部屋で、竹竿にビニールひもで一荷に結んだ柿を掛けて干す。乾燥をよくするため中でストーブを焚き扇風機を回す。以前は片屋根のカキゴヤに吊るし寒風で乾燥させるのが一般的だった。

一ヶ月くらいすると、飴色に乾燥し、適当な固さになる。それくらいになると2回ほど分けて手で揉み、そして平箱に並べてワラを被せて寝かせる。1週間くらいで表面に粉（糖分）が吹いて完成である。与謝ころ柿出荷用の専用箱に入れて、JAを通じて出荷する。

明治期の『京都府園藝要鑑』の志楽・五箇・久美谷の記述も基本同じだが、違うのは同書には硫黄燻蒸が無いことである。また志楽村の場合霜月下旬に採取とあり、今より採取時期が遅い。^(注1)正月祝い用に出荷するには、年により寒風が十分吹かない気温の高い時期に採取しなければならない場合も考えられる。そのためには防かび対策が必要となるだろうし、都市市場に出荷する上では色艶の良さも問題になると考えらる。その対策には硫黄燻蒸技術が有効である。

硫黄燻蒸は、最初あんぼ柿の産地福島県伊達市梁川町五十沢で導入された。大正時代中頃アメリカの干しブドウ作りで硫黄燻蒸の使用の情報から、試験を行い加工技術に成功し、あんぼ柿も全国で好評を得る。^(注2)

聞き書きでは硫黄燻蒸は与謝郡でも戦前から行われており、『与謝古ろ柿に就て』で、福島県の伊達郡農会技師から技術指導を受けたとあるので、恐らく昭和初期に新たに導入された加工技術は、硫黄燻蒸ではないかと考えられる。

おわりに

以上、「与謝ころ柿」の新旧の加工技術の違いを中心に述べたが、まだ推論の域を出ず今後資料や聞き取り調査で確認をしていきたい。

(注1) 久美谷村では、11月初旬に採取して仕上がりまで7～9週間かかっている。

(注2) 『福島県農業史』4巻 P512-514

神明山古墳出土の船の描かれた埴輪

奥村 清一郎

はじめに

ここに資料紹介する埴輪片は、昭和54年12月1日付けで府立網野高校から当館に寄託された考古資料の中の1点で、神明山古墳で表面採集されたものである。当館発行の図録・目録等の印刷物では、長らく「船をこぐ人物の絵が線刻された埴輪」として掲載してきた資料である。その後、林日佐子氏^(注1)や仁木聡氏^(注2)から、準構造船の絵であるとの見解が公表された。これを機に、当館としても資料の再調査を実施し、再検討を行うこととしたものである。

資料の概要

復元径32cm前後の円筒埴輪の体部片である。横16.3cm、縦11.8cm、厚さ1.5cmの小断片で、左端には縦方向に切り込まれた方形の透かし孔がみられ、上端にはタガの剥離痕跡が認められる(図1・写真1)。器壁の表面はタテハケ調整、裏面はナデ調整され、裏面の中央に「神明山古墳出土」と墨書されている(写真2)。

線刻画は、器表面の中央から右下の範囲に描かれている(図2)。左下の3本の沈線によって表現される三角形の図形は、船の舳先の表現とみて間違いない。ただし、準構造船の刳船部の先端とみられる。その上の逆「U」字形の線刻は、従来の見解では人物の胴体の表現とされていたが、船首部に偏りすぎていることや前に傾斜していることなどからみて、準構造船の縦板の表現とみられる。縦板の上に描かれた、縦方向の3本の沈線と2本の方向の異なる斜線によって表現された図は、船首に掲げられた旗または幟の図像と思われる。縦板から右に伸びる2本の沈線は、従来の見解では竿をさす人物の手の表現とされていたものだが、上の線はマストと船首とをつなぐロープの表現、下の線は舷側板の上端の表現とみられる(写真3)。その右側に、約4.5cm間隔を保って平行に描かれた、2本の縦方向の沈線がある。これは船の中央部にたてられた二本の帆柱の表現と推察される。この二本マストに挟まれた中央部では、舷側板の表現が一部欠落しているように見受けら

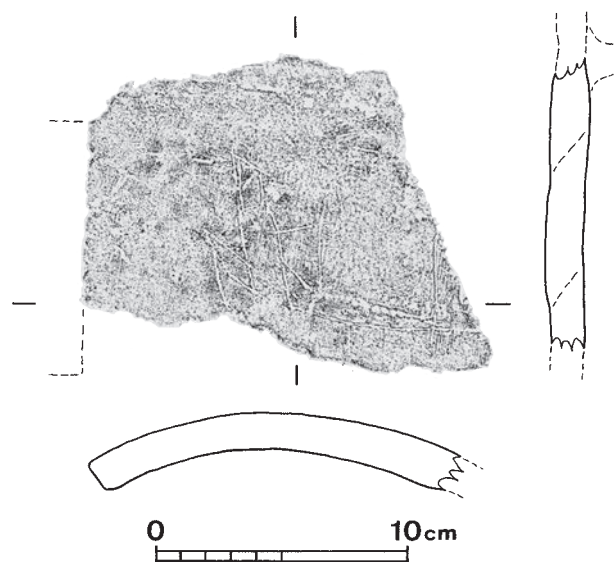


図1 神明山古墳出土の線刻埴輪片実測図・拓本

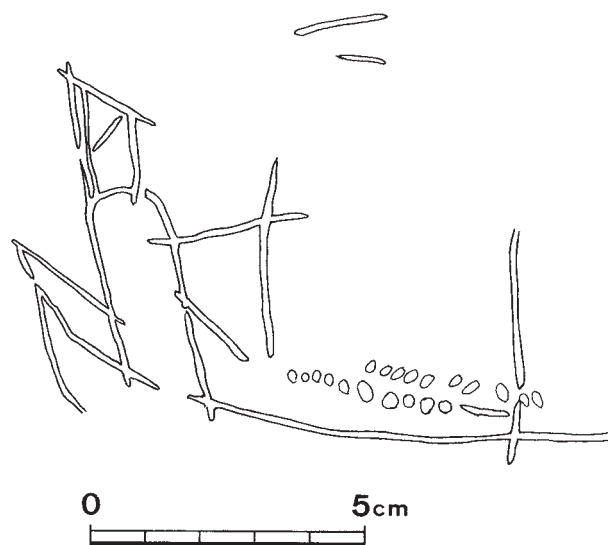


図2 線刻絵画実測図

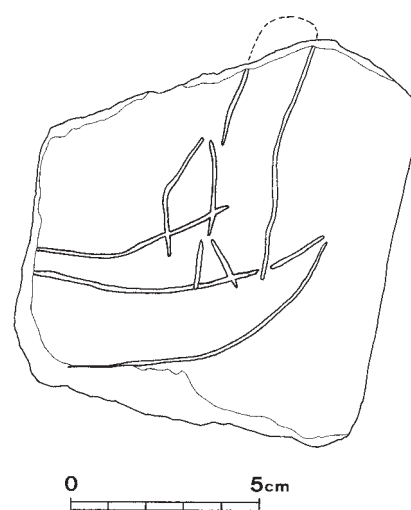


図3 梅原末治氏によって報告された線刻埴輪

れるが、詳しく観察すると先の丸い棒状の原体を用いた連続刺突文が施されていることが判明した(図2)。連続刺突文を用いて、櫂の支点を表したものと推察される。この連続刺突文は2列あり、対岸にある右舷の櫂の支点をも表すものとみられる(写真3・4)。

ところで神明山古墳出土の「船をこぐ人物」線刻埴輪は、もう1点知られている。梅原末治氏^(注3)によって紹介されたもので、図3は報告書に掲載された写真をトレースしたものである。この線刻埴輪片についても、準構造船の船首部の刳船部と豎板、および豎板から左斜め下方に延びる舷側板を描いたものとみて大過ないであろう。

おわりに

日本海沿岸第1位の規模の体積を誇る神明山古墳の築造にあたっては、莫大な数量にのぼる資材が調達されたと推定できる。陸上交通による物資

の運送が未発達であった当時においては、埴輪・葺石・豎穴式石室用材などの運漕に際して、準構造船が大活躍したであろうことは、容易に推察できる。

埴輪に船を描く際にも、その船が線刻画のモチーフとして採用されたと推察される。さらに、準構造船をモデルとした埴輪や木製品も作られた。ニゴレ古墳出土の船形埴輪や古殿遺跡出土の船形木製品などが、その例として挙げられる。

(注1) 林日佐子「倭の国々との交流と外交」『青いガラスの燦き—丹後王国が見えてきた—』大阪府立弥生文化博物館 平成14年

(注2) 森田喜久男・仁木聡「北ツ海の交流」『古代出雲の壮大なる交流—神々の国を往来した人と文物—』島根県立古代出雲歴史博物館 平成23年

(注3) 梅原末治「神明山古墳出土品」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第14冊 京都府 昭和8年

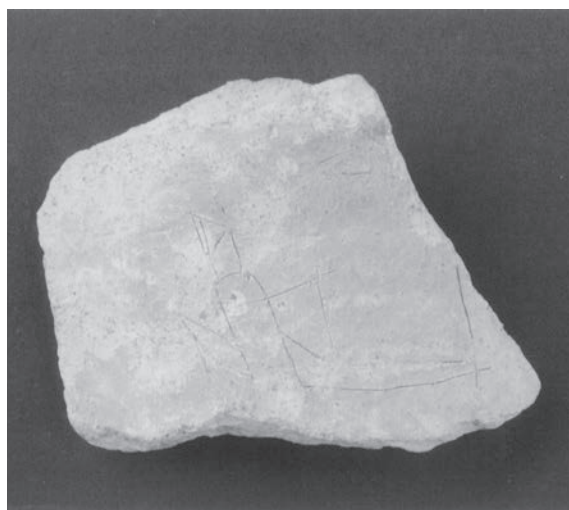


写真1 線刻埴輪の表面



写真3 船首部の線刻画

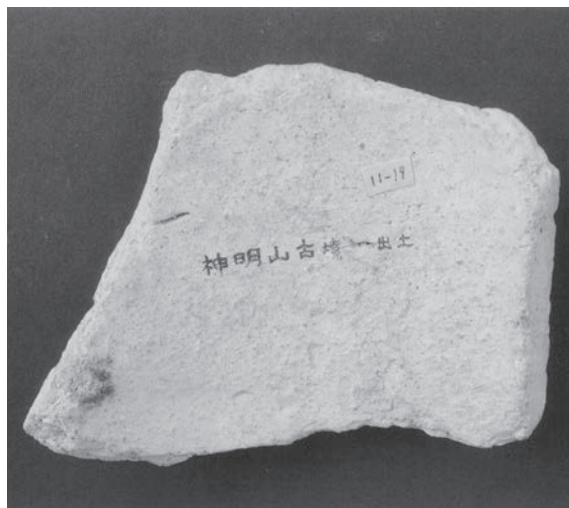


写真2 線刻埴輪の裏面



写真4 船中央部の線刻画

安政江戸地震時の宮津藩の被害情報について

資料課 吉野 健一

はじめに

昨年3月11日に発生した東日本大震災は、M9という古今未曾有の巨大地震であり、この地震により発生した津波によって1万5千人を超える尊い人命が奪われました。今なお安否の分からない方や避難所生活を余儀なくされている方が多く居られます。また、福島第一原子力発電所の事故によって放射性物質が大気中に放出され、現在も福島県を中心に自宅へ戻ることができない方々が数多くおられます。

ここに、犠牲となられた方のご冥福をお祈りするとともに、一日も早い復興に向けて、私自身もでき得る限りのことをしたいと考えております。

このような広範囲に及ぶ大規模災害が発生した際には、様々な情報が多くの人々を通して瞬時に飛び交い、伝えられます。今回の大震災では、携帯電話やツイッターなどの通信手段を使った情報の伝達が行われるなど、災害時の情報を考える上で新たな展開も多く見られました。一方、テレビ・新聞等が伝える情報には、被害情報や安否に関する情報など様々なものがありますが、これらの情報は、広く国民に伝えるべき情報として報道機関が判断したものと言えるでしょう。そして、それらの情報は、官公庁などからも発表されました。このような情報を、国民に伝えられるべき「公的情報」と考えると、そのような情報はどのような基準で、またどのような理由で発表され、伝えられるのでしょうか。

安政江戸地震と宮津藩

これについて、宮津藩内に残された触留の記録から、幕末に江戸を襲った安政江戸地震の際の宮津藩主の安否情報を含む藩の被害情報が、どのように取り扱われたのかについて考えてみたいと思います。

安政江戸地震は、安政2年(1855)10月2日、東京湾付近を震源として発生したと考えられる地震で、江戸城をはじめとして、諸藩の藩邸や江戸市中に甚大な被害が出ました。死者は

4000人に達し、また火災が発生したことから江戸市中の広範囲において建物等が焼失しています。また、この地震では、在府中の藩主や家臣にも死傷者が出ました^(注1)。

さて、この地震に関連して、宮津藩の領内には次のような触が出されています(「西原家文書」近世E-2)。早速翻刻してみよう。

《翻刻》

去ル(安政二年十月)二日戌中刻過、江戸表地震にて、御上屋敷土塀不残震倒し、三御屋敷共所々大御破損等有之、安養寺御宝塔不残、玉垣・土塀不残震倒し、御位牌所御念仏堂壁不残震倒し、本堂・庫裏震倒し候義二有之候、殿様(本庄宗秀)・若殿様(本庄宗武)、上々様何之御差障も不被成御座、御立退被遊候間、一統可奉承知候、右之段、被仰出候間、村々可得其旨候、尤寺社方へも庄屋方方可申通候、此廻状村名下二印形いたし、早々順達、留村より郡役所へ可差戻之候、以上

十月廿日出

同廿四日拝見

宮地仁之右衛門

村田宇右衛門

増戸藤次兵衛

村々

《翻刻注》

* 西原家は江戸時代、与謝郡算所村(現与謝野町)の庄屋を勤めました。

* ()内は、著者が加えたものです。

* 安養寺は、江戸浅草にあった、本庄家の菩提寺。

* 「上々様」については、特定の人物を指すのか、また藩主家の人々を指すのか確定できませんでした。今回は、藩主家の人々として解釈しています。

* 宮津藩上屋敷は、霞ヶ関(現在の財務省附近)にありました。

この触は、藩から村々へ宛てたもので、通常の触と同じ形式で出されています。この中では、①10月2日戌の中刻(午後9時頃)に江戸で地震があったこと、②地震のため宮津藩上屋敷の土塀

が崩壊するなど、藩の屋敷の所々で大破損があったこと、③菩提寺である浅草安養寺の宝塔・玉垣・土塀・念仏堂などが崩壊したこと、そして④藩主と世子がそれぞれ無事だったことが伝えられました。

この触は、「一統承知奉るべく」との記載もあることから、宮津藩で藩士達に向けて伝えられた情報と思われそうですが、それがそのまま触として領内に廻されたものと考えられます。この中では、將軍の安否情報については触れられていませんが、宮津藩主や世子の安否情報に加えて、藩の江戸屋敷の破損状況や菩提寺の状況についても詳しく伝えられています。これらのことから、藩の当局者は、藩主の安否情報や藩の被害状況を、領内の人々に知らせるべき情報であると認識していたことが分かります。藩としては、藩主の正確な安否情報を領内に伝えることで、領民の動揺を抑えるとともに、今後も一貫した統治が続くことを宣言する意図があったのではないかと考えられます。

一方、情報を受け取る側の領内の人々にとっても、藩主が誰になるのか、ということは生活に直結する重大な情報でした。藩主の交代によって、大きく政策が変われば、年貢の負担などが大きく変わることもあるため、江戸時代後期になると、藩主が変わることに反対した領民達が、大規模な運動を起こすこともありました^(注2)。

情報が「流通」する時代へ

江戸時代も終わりに近づくと、異国船の来航や江戸・京都の情勢についての情報が、広い範囲で盛んにやりとりされていたことが明らかになりつつあります。特に商家では、商売に直結するため、積極的な情報収集が行われていました。宮津藩の御用商人でもあった元結屋三上家文書の中には、安政江戸地震の際の瓦版も残されていますし、それ以外にも、様々なルートを使って情報収集を行っていたことが分かる資料があります。

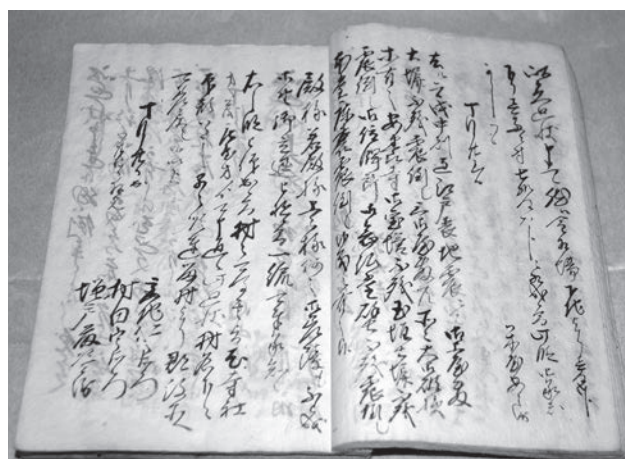
おわりに

今回は、幕末の「触留」に残された、安政江戸

地震時の宮津藩の被害情報から、江戸時代の「情報」について考えてみました。ここで伝えられた藩の被害状況は、この時代、伝える側にとっても、また、受け取る側にとっても必要不可欠な「公的情報」であると考えられていたのではないかと思います。そしてそこには、情報が共有され、積極的にやりとりされるようになった幕末という時代背景がありました。このような「公的情報」は、その後、どのような変遷を遂げて近代へとつながっていったのでしょうか。これらについては、今後の課題となりますが、江戸時代当時の「情報」の性格を考える上でも、この安政江戸地震時の宮津藩の被害情報は、重要な示唆を与えているように思われます。

(注1) 安政江戸地震については、北原糸子『地震の社会史—安政大地震と民衆』（2000、講談社学術文庫）、北原糸子編『日本災害史』（2006、吉川弘文館）、野口武彦『安政江戸地震』（2004、ちくま学芸文庫）などに詳しい。

(注2) 天保11年（1840）、庄内藩主であった酒井氏は、越後への転封の命令を受けますが、安定した治世を行ってきたにも関わらず転封されることに対して、藩内の民衆たちが広く反対運動を起こしました。結局、將軍の死去などによりこの転封は沙汰止みとなりますが、領民たちが自らの藩主が変わることに反対し不満を持ち、反対運動を行ったということは、藩主と領民との関係を考える上でも興味深い事柄です。



「西原家文書」安政2年「御用帳」より、宮津藩の被害情報を伝える触

2011 年度のあゆみ

平成 23 年 (2011)

- 4.1 常設展「丹後の歴史と文化」(～ 3/31)
 4.16 春季特別展「美の風景－天橋立と名所絵
 屏風の世界－」(～ 5/29)



- 4.23 文化財講座①
 「名所を描く－天橋立を中心に－」
 講師：京都工芸繊維大学大学院
 教授 並木 誠士 氏
- 5.21 文化財講座②
 「名所・和歌と細川幽齋」
 講師：京都女子大学教授
 教授 大谷 俊太 氏
- 6.18 夏季企画展「宝蔵山古墳と成山古墳－由
 良川水系の前期古墳－」(～ 9/19)
- 6.23 両丹ミュージアム連絡協議会の設立
- 7.16 文化財講座③
 「由良川水系の前期古墳」
 講師：綾部市資料館館長 近澤 豊明 氏
- 7.16 友の会つどい (研究交流会)



- 7.23 ジュニアクラブ「そば作り教室」
 (8/6・20、10/29・11/12、12/18)
- 7.26 博物館実習生 (3名) 受入れ (～ 7/30)
- 7.30 ジュニアクラブ「勾玉作り教室」
 (～ 7/31)
- 8.2 千葉大学安久家文書調査 (～ 8/6)
- 8.27 文化財講座④
 「畿内か山陰か－丹波の古墳時代－」
 講師：丹後郷土資料館主査 奥村 清一郎

- 9.17 特別公開 重要文化財 湯舟坂 2号墳出
 土「金銅装環頭大刀・銅鏡・須恵器」
 (～ 10/16)
- 10.8 秋季企画展「蕪村、丹後に遊ぶ－三とせ
 あまり、画に俳に－」(～ 11/20)
- 10.8 文化財講座⑤
 「蕪村の画業と俳句と人生」
 講師：和歌山県立博物館学芸員
 安永 拓世 氏
- 10.20 ジュニアクラブ「和カンジキ作り教室」
 (2/11・12)
- 11.3 文化財講座⑥
 「蕪村ウォーク－遺墨をめぐる旅」
 講師：丹後郷土資料館技師 吉野 健一
- 11.11 友の会研修旅行
 「京都国立博物館と東寺 (文化財修理現場)
 を巡る旅
- 11.19 第 22 回紙すき教室
 (11/20・26・27、12/3・8・13)
- 11.20 両丹地方史研究発表大会
 会場 福知山市民会館
- 12.10 企画展「第 13 回守り育てようみんなの
 文化財展」併設「京の職人さん展」・「ち
 ょっと昔の丹後の写真展」(～ 2/12)
- 12.10 ジュニアクラブ「凧作りと正月行事」
 (12/17、1/7)

平成 24 年 (2012)

- 1.28 文化財講座⑦
 「京都府内の埋蔵文化財調査－近年の成
 果について－」
 講師：(財)京都府埋蔵文化財調査研究
 センター
 次席総括調査員 伊野 近富 氏
- 2.25 企画展「みせます丹後のお宝－丹後の暮
 らしと柿渋－」(ふるさとミュージアム
 コレクションⅧ) (～ 3/31)
- 2.25 第 27 回古文書講習会①
- 3.3 第 27 回古文書講習会②
- 3.10 文化財講座⑧
 柿渋体験教室「柿渋の型染め栞作り」

丹後郷土資料館調査だより 第1号

発行 2012年(平成24年)3月16日

編集 京都府立丹後郷土資料館

〒629-2234 京都府宮津市字国分小字天王山611-1

TEL(0772)-27-0230 FAX(0772)-27-0020